

# 二千五百年の思想清算

高楠 順次郎

二千五百年の思想清算と云ふ妙な演題である。或る所でこの題を出したら、佛誕二千五百年を主張し出したが出来なかつたので、それを清算しようとするのであらうと云ふ者があつたが、然しさう云ふ意味ではなく、一般に二千五百年に因んで思想を清算しようと思ふ意味である。

先づ本題を論ずる前に、何故二千五百年を喧しく言ひ出したのであるかをお話しよう。

現在では一般大學で公然とはこの記念の式を行ふ事が出来ないと思ふ場合に、本學でかゝる式を催す事を私は非常に喜ばしく思ふ次第である。それでこゝに此の記念の年を明白にして置きたいと思ふのである。十一月十日には名古屋で縣の奉讃會が催されるし、十二月には帝大に於て全大學關係の停年に達した學者達が發起して、同じく奉讃會が行はれる事になつて居る。

扱て二千五百年と云ふのは無論傳説であるが、然し傳説ほど大切なものはないのであつて、研究等云ふものは次の人に依つて滅される事があり、それを信ずるとか信じないとかは自ら別問題である。傳説にある場合には研究の場合と違つて、二つあれば二つとも採用する事が出来るのである。古事記にも傳説は幾つもある。然し傳説には筋の通つたもの

と、通らないものがあるから、我々は前者に就て考へなければならぬ。研究等云ふものは之れに近づくに過ぎないものである。然らば最も正當に近い傳説は何であらうか。それは佛誕の場合で申せば佛時代より今日まで續いて居るものがある、それは正しいものと信ずる事が出来るが、それは支那から傳つて來た衆聖點記である。此れは阿闍世王の八年、阿闍世王と云ふ王は佛教に入つた時には、最も盛んな時代であつて、彼は悪人であつたが爲に、それ丈神經質な人で熱烈なる信者となり、偶々佛涅槃を聞いて氣絶し、幸に恢復して、佛が實に涅槃に入られたら我々は斯うして居られないと云ふ事で、自ら佛骨を受取りに行き、その一部分を得て立塔供養を爲し、一切經を結集する五百人の比丘の爲に、十八大寺を修理して、五百の大士の起臥出来る様にした。結集を成したと云はれる南山の七葉窟は今はなくなつて居るが、その前の大講堂の兩方の石段は今尙ほ段つて居る。兎に角、かくして一切經を結集した。然し律は集める必要はなかつたが、律の歴史、例へば何時、何處で、誰の爲に作られたものであるかを書いてこゝに律藏も結集された。そしてその結集は佛涅槃、二月十五日より五月十五日迄に出來た。即ち佛涅槃の最後の安居の三ヶ月間に集められたのである。茲に佛涅槃一ヶ年後に集められたと云ふ説があるが、それは間違ひである。抑々大迦葉結集の動機は佛滅後に於ける善賢比丘が、滅後人天號哭して師を失へる比丘は天地も崩れる許りに悲しんで居つたのに、彼一人衆中に在つて喜べと叫んだ。大迦葉は之を聞いて結集の必要を感じたのである。そして亦阿闍世王の如き人物が、一ヶ年も手を下さずに置いたとは考へられない。自恣の日は佛歡喜の日で、大仕事を終て、學得に進んだと云ふ時に、律藏の結集をもなしたのである。

そしてその結集の終つたときに一の點を打ち爾來毎年一つ點を打ちながら、優波離より目捷連帝須、更に阿育王の子、摩晒陀へと受継ぎ、摩晒陀は諸の佛典並に之を傳へてセイロンに行き、本の諸佛書は巴利書であつたであらうが、註はセイロン語でかゝれ、更に巴利文に翻譯された。斯くして次第に傳つて行つた。而して、その翻譯者（巴利文に）たる佛音三藏は之を持つて廣東に來た。時に、三藏八九十才の高年であつたが、乗つて來た船で、亦本國に歸つて行つた。そして三藏は弟子の衆賢論師を残して行つて、持つて來た善見律毘婆沙（律の註）を翻譯せよと命じた。その年は齊の永明六年である。そして次の安居迄にそれを律藏と共に譯し、自恣の最終日を以て一點を加へた。之れが支那最初の一點である。而して永明七年迄にこれは九百七十五點あつた。それを二千五百年から引いて釋尊の壽命を八十一才として計算すれば、佛滅は紀元前四百八十六年となる。歐洲に於ての研究も多數あるが、その中で最も穩かなのは、Max Müller の紀元前四百七十七年と云ふ説である。セイロン、シヤム、ビルマ等に於ては紀元前五百四十三年と云はれて居るが之れは明らかに六十年が加へられてあり、而も何時加へたかも明白になつて居る。さうすればこれは論ずる必要がない。多少の違ひ位は耶蘇の年代にもある事である。兎は角これ程適切な所まで行つて居る。その差は十年以下の差である。二千五百年の間この位の差は問題とするに足らない。尙ほそれには星の居所まで書いてあつた。私は曾て之れを研究參考にする爲に、天文臺で星の研究をやり、二日間徹夜をした事があるが、然しそれは星の居處が漸時違つて行くものであるから駄目であると云ふ事を知つて、その計算をやめた。

兎に角佛涅槃から齊の永明七年迄一點宛を加へられ、それより五十年後の計算に千二十八點あつたと書いてある。永

明七年を庚午と計算して居るが、八年が庚午である。私は七年説に依つて居る。何故なれば、支那に来る前の安居はピルマで爲した。支那に来た七年に安居せず、翌年の八年に初めて安居する等と云ふ筈はない。實際の記録は此處迄であるがその後一點づつ加へて計算して見ると今年で二千五百年目となるのである。以上の様な意味で、支那に来た三藏は佛音三藏である。私はこの人以外に有り得ないと思ふ。然し兎に角その人は誰にせよ、立派な人であらう。そして彼の將來した善見律は佛音の作つた律の註である。私が西洋に於て或る本に、衆聖點記を載せた時 Vincent Smith は非常に賛意を表した。處が其の後印度に碑文が出た。それと較べて見ると五、六十年の差がある。即ちセイロンの方が増して居るのである。こんな譯で彼は賛成を撤回してしまつた事がある。私はこの二千五百年の記念を大いに意義あらしめる爲、そして佛敎國日本を世界に紹介する爲に、この記念を期して、日本國中五萬の寺院より一ヶ寺壹圓宛出してその五十萬圓と實業家よりの喜捨五十萬圓とを併せて、世界の學者を招かんと企圖して居つた。之れが日本の佛敎を世界に紹介する最もよい手段であると思つたが、然し今となつては出来ないが、兎に角佛敎の年代を西洋人に教へるには衆聖點記でなければならぬと思ふ。

さて、佛誕二千五百年、正法でも二千五百年には末法となる。鬪諍に固められたものとなる。佛敎のみならず、之れは如何なる思想に對しても警戒された言葉である。五百年を五度越すと云ふので警戒したのである。如何なる思想と雖も、二千五百年も経過すれば、清算されなければならぬものである。一旦清算されてその後に残るものは、眞に我々の財産と見るべきものである。現在我々當面の問題は西洋の物質思想である。この物質思想に對して、今迄の何の思想

が一番大きい對抗力を有して居るだらうか。兎に角かやうな思想が有りさうなものである。之を吟味する爲には、思想道程が最も長いものであると云ふ事が必要である。憚りながら西洋にはかゝる思想はない。それは色々な思想に遭遇した思想でなければならぬ。是の如く大きく、長く、種々なる思想を体験したものは、今も昔も佛教以外にはない。今の西洋と同じ事情に於て佛は出世せられて、佛以前二千五百年間榮えて居た思想を一々清算せられて、自分の説を御立てになつた。それで佛教の思想道程は、今日迄合計五千年を經過してゐる譯である。然し五千年經過したから古くなつて役立たないと云ふ意味ではない。西洋人は佛より二千五百年後の今日に於て、佛が二千五百年前に既に清算された思想と同様な思想に遭遇して、而もそれを學術で裏付けて、それに縛られて自ら動かない様な状態になつて居る。故に現在の物質思想の清算には、佛教が最も役立たねばならない譯である。私は次にその事に就てお話ししよう。

アリアン人は、今の西洋人と同じ人種であつた、彼等は佛以前二千五百年前に印度を征服したのである。彼等はその當時から利己的實利主義物質主義になり勝であつた。彼等は征服した民族を奴隸にし、教育の權利、宗教の權利を與へず、終生奴隸の階級に居らなければならぬやうにした。かやうな人種は外にないであらう。そしてアリアン人種はそれを吠陀で裏付けた。即ち造物主が互に異なる階級に造つたのであると云ひ、婆羅門は頭から、王族は脇の下から、商工業者は普通の所から、奴隸は足から生れたのであると吠陀に書いてある。是の如くに奴隸を壓迫して居る。奴隸の中で最も汚い仕事をする者に觸れてはならぬ。一度觸れ、ば五百年も元に歸られないと言はれて居つた。現在ガンヂーは之を解放する爲に英國に對抗して居る。かゝる奴隸階級を未だに西洋人は認めて居る。そして被征服人は皆奴隸として賣

られて居る。兎に角かゝる性質を持つて居たのがアリアン人種である。然るにかゝるアリアン人種を征服したのがかの大雪山である。印度の如き環境でなければ、あの須彌山説は出て來ない。二萬四千尺以上のヒマラヤ山が聳え、その下には香醉山があり、それをとり巻いて黒山がある。釋尊が雪山に登つたと云ふのはこの黒山である。即ち黒山の北側の斜面の石上、その上には木が蔽ふて居り、その下で修行されたのである。そして彼等アリアン人は氷河を見て驚かされた。是の如く見えるものは皆動いて居る。坐禪はその動くもの、中から動かぬ實體を考へ出す冥想である。かゝる坐禪冥想に依つて印度人は救はれた。かゝる冥想法あるが爲に哲學を單なる辯證遊戲に終らしめず、又宗教を迷信ならしめなかつた。この冥想ある爲に宗教と哲學とは永遠に抱合して離れなかつた。然るに西洋に於ては宗教は猶太より哲學は希臘より來り、この二つは結婚したのであるが、中世に至つては、是の如き足弱な宗教を連れて行つては哲學の進みに故障を生ずると云ふので、全く離婚の破目となつたのが西洋である。かくして分裂の文明が出來、哲學と宗教とは分れたものと考へられた。智で考へ、情で行ふと云ふやうになつた。階級國家社會は各々別々になり、かくして大戦争を起した。生存競争は文明の墓となつた。之れが近代の西洋の状態であるが、印度では佛以前にかゝる思想が出て居つたのである。即ち、以上の如くにして印度に於て最初に出來たのが、人種本位の排他思想で、之れが印度の始めから佛以前に成立して居つた。それに對して佛が出世せられ、その間違つて居る事を正されて、人間本位でなければならぬと云ふ所謂人格的理想主義が説かれたのである。

之れと同時に、奴隸階級の差別思想に對しては、佛は一味和合の教團を示された。奴隸の中に於ける糞取人夫も佛門

に入つた。理髮師の優波離は持律第一となつた。何人でも教團内に於ては同一平等である。之れが全体の社會的差別階級の打破である。

印度には民間哲學の思想と森林哲學との兩方がある。後者は仙人の宗教、山の宗教で、前者は唯物論的である。此の中國で民間から出た唯物論的實在思想が非常に盛になり、何處へ行つても行はれる様になつた。即ち邪命、順世、苦行等の外道等が皆之れである。是の如く民間思想が勢力があつた。そこでこの二思想は妥協することとなり、三吠陀にアタルヅ吠陀を入れて四吠陀と爲したのである。この唯物主義は非常な勢力を持ち、五官があつて精神はそれから出來た。人間の作つた道德が自然に對して何になるかなど云はれて居つた。この唯物論的實在主義に對して佛はまた精神的理想主義を主張された。

次にはまた享樂主義、樂觀主義と云ふものから出た宗教に對して、佛は苦觀主義を主張した。苦とは三界の事實を言はれたものである。苦觀は佛の發明ではなくて、宇宙の事實である。かくして佛は忍苦の教を唱へられた。忍は沙門の力なり、涙は女の力なりと云はれて居る如く、如何なる苦でも忍ばなければならぬ。故に苦觀主義は悲觀主義ではない。處が茲に反對の苦行厭世主義があつた。此の身を壞して次の世に生れると云ふのである。今の印度は苦行病と云ふ宗教病に罹つて居る。かゝる兩極端即ち樂觀主義も苦行主義も共に排斥せられて、中道の教を布かれたのが佛の初轉法輪の説法である。耶蘇教では樂觀主義を説いて居るが、事實は苦行を爲して居る。佛は修道を重要なものとした。修道と云つても間違つた道を修めてはならない。例へば物を言はない修道があるが、それは苦行である。だから佛は修道と共

に見道を説いて居る。日本人は迷信病に罹つて、祈禱をやり宗教を手段とするのは、不健康な慰安である。日本人は迷信で滅ぶと思ふ。佛教も亦迷信で滅ぶと思ふ。佛教の中でも禪宗、眞宗は將來の宗教となるべきものであるから、斷然迷信的要素を斥けなければならない。眞宗には迷信的要素は全くないと斷言する。禪宗に於ても本來ないのであるから、世の中の迷信を無くするやうに力めて貰ひたい。つまり佛教は中道の教であり理性主義である。

この民間説の結果として、自然主義、無因主義が起つて來た。それに對して佛は、因縁主義を主張された。

この自然主義、無因主義などの哲學は奥義書より出て居るが、それは哲學としては自我哲學である。動くもの、中から動かぬものを求めるのである。外に向つてはそれは梵であり、それを内に探す時は我となる。即ち宇宙我と個人我とが一体であると云ふ。所謂梵我一如なるものであると云ふのである。然し重要な事はこの我の思想である。

我と言ふ動かぬものがあり、個人には靈と云ふものがあり、宇宙には本体があると云つて居る。佛はこの迷を正す事に最も骨折られた。この自我哲學に正面より當つて行かれたのが無我哲學であり、無我の倫理である。故に佛教には我の思想は近頃では這入つて來たが、根本思想に於ては、何時でも否定せられて居つた。西洋人は、教育、家庭、社會に於て個人主義を養つた。かくの如く骨折つて養ひあげて、凡てが個人主義に陥つたので、西洋人自身が呆れ返つて居る有様である。之れに對して佛は無我の思想を以て當られた。

亦常住の思想も同様である。常住唯物の思想は、鬼に角あつた。地水火風空の五大があり、己れの肉體は殺すことが出來ても靈魂は殺す事が出來ないと云ふ。之れがタゴール、印度哲學の主張である。今でもかゝる思想がある。輪廻も



かゝる意味で云はれるならば、佛教の根本思想とはなり得ない。耶蘇教では永遠不變の魂を説く。佛は常住に對して無常説を以て當つて居る。常住のものが宇宙に現はれ、成立する爲には、一つの變らぬ造物主、創造者が定立されなければならぬ。それは常住の存在である。この一因説に對して因縁の二つを説くのが佛の教である。

佛は是の如く佛以前二千五百年間印度に行はれて居た思想を清算されたのである。それにも拘らず、耶蘇が出て、*ホメツト*が出て、佛の清算された造物主の思想を繰返して居る。十六世紀になつて造物主思想の根據のない事が漸く解つて來た。*タゴール*は同じく進む道程に於て、梵の世界に飛び込み、之れが即ち平等の世界であるとした。佛教は殊更に飛び込まなくとも、平等の世界に生活して行けると言ふ教である。日本の神道もやゝ佛教に似て居る。人間と言ふ土臺あり、それを神として祀つたのが所謂神社の神である。此の意味で神道は佛教に近いと言ふことが出来る。耶蘇の教は佛教に合一することは出来ない。佛教からすると、人間は自己創造であり、宇宙は人間の共同創造である。この創造の力が業力であり、この力に依つて人間も宇宙も成立した。是の如く佛は輪廻自己創造を説かれて居る。*Huxley*と云ふ進化論者は、「造物主の説のやうに人間が初め造られて、それが墮落したと云ふ説には反對せねばならないが、佛教の輪廻の説に於ては進化と退歩とを説くから之を認めなければならぬ」と云つて居る。

以上之れ迄の話を要約すれば

一、人種中心の排他思想 西洋に於てはその昔佛が印度に於て既に清算されたにも拘らず尙現在残つて居る。佛はこれに對して人間的理想主義を主張された。

二、奴隷階級の差別思想 之れに對して佛は一味和合の教團主義を實行された。然るに現在に於て、西洋にはまだ此の思想がある。例へばアフリカ人と共に飯を食へば紳士ではないとされて居る。

三、唯物主義、實在主義 之れも現代顯はれて居る。之れが現代の非常時をもたらしたと云つてもよい。佛は之れに對して精神的理想主義を稱へられた。

四、享樂主義、樂觀主義 之れに對して佛は苦觀主義を稱へられた。

五、厭世主義、苦行主義

此の四、五に反對して佛は中道の理性主義を力説された。

六、自然主義、無因主義 西洋人の大部分は之れである。佛はそれらに對し因緣主義を稱へられた。

七、自我哲學、個人思想 佛は無我哲學を對立した。

八、常住說 佛は無常說を稱へて居る。

九、造佛思想、一因主義 之れには西洋人自らも愛想を盡かして居る。然しかく西洋人がこれに愛想を盡かしたといふ事は最早有神教的宗教を捨てる事になる。そして佛敎に入る初門である。然るにその造物主の思想が、次第に日本人の頭を支配して來た事は殘念である。かくして行けば西洋人と同一の道を歩く結果とならざるを得ない。

以上九つに分けて説明した思想を、佛は二千五百年前に既に清算されて居るのである。而して、爾後、今日に至るまで、佛敎は五千年の思想道程を有して居る。それを現在日本が持つて居ると云ふ事は我々の誇である。私はこの佛誕二

千五百年を機會として、現代西洋人が惱みつゝある思想と同様の思想を、二千五百年前に既に清算された偉大なる佛陀とその教とを、彼等西洋人に紹介しようと思つて居た。ヒットラーが曰く「精神的なものは日本から喜んで受けるから、made in Japan の安物は餘り送らないで呉れ」と。然るに精神的なものを送らうとしても、現在第一人物が居ない。現在佛國から招かれて居るが、それに應じ得ぬ状態である。

佛教の深く、大きいのは何故かと言へば、五千年の思想道程を有するからである。佛教がなければ日本はもつと發達しただらうと云ふ人があるが、それは日本人の中にも佛教を知らない者があるのではないか。

西洋の思想も二千五百年で行き詰つて居る。即ち六百年の希臘時代と以後千九百年、その間にローマの法律思想も含まれてある。基督教思想は精神文明を作らんとして、物質文明を作り、反精神主義を作つた。希臘思想の遺産が現はれて來たのが現今である。即ち上塗が悪かつたのである。物質を追ふて經濟が發達した。

日本の思想にも垢が附いて居る。日本の垢は建國の理想に歸ればよい。佛教思想の清算も釋尊の理想に歸ればよいのである。然るに西洋人は歸る處がない。希臘に歸ればもつと悪くなる。國として希臘程墮落した國はない。故に西洋人は蝶の花を追ふ如く次から次へと移り行く經濟的發展より外に進むべき途はない。之れが國際聯盟、軍備縮少となつて現はれたのである。同じ状態に日本もなつて來た。即ち利害得失の經濟團體である。之れを扱ふに佛教精神を以てしなければならぬ。日本精神なるものが、佛教を是の如くよくしたのである。佛教の完全に残つて居るのは、日本以外に何處にもない。各宗共に喧嘩をしながらも調和を保つて來た。そして各宗が大學を持つて、今日迄研究を續けて來た。

佛教を是の如く組織的に、完全に、徹底的にしたのが日本精神である。我々は日本精神と佛教と云ふ二大力を以て、經濟團體に對抗して行かなければならない。つまりぬ利益を考へてはならない。

支那も、二千五百年の思想に困つて居る。支那は孔子を清算して了つた。支那と西洋とが一緒になれば、日本は困るだらうと云ふので、孔子の祭をやめて了ふ。孔子の村に大砲をすへて戦争をしたと云ふ。そして一時國名を中華民國と改めたが、現在では亦元に歸つたと云ふ状態である。彼等は自らの國の大切な事に氣付かない亡國の民である。

印度も同様に、佛陀は既に造物主義の思想を清算したにも拘らず、佛教を清算して、マホメットが之れに代り、本國には佛教が殆ど絶えた。然るに今や世界の宗教となつて居る佛教の教祖釋尊が印度から出て居ると云ふので、我にかへり、現在では相當多數の信者が生じて居る。然し兎に角印度は亡國である。自分の國で最も大切なものを捨てる様な事ではならない。日本に於ても大切なものを捨て、はならない。それは佛教であり、佛教美術であり、一切經である。本思想にかへるのが理想に歸る事であると云ひ得るのは、佛教と日本精神より外にない。西洋に於ては本に歸ると云つても、歸る所がない。ペルシヤ教も破れて、基督教の一神教となり、次第に物質の方に進んで行き、かくして經濟團體が出来上つた。そして行き詰つて惱んで居る。識者はその清算を佛教に求めようとして居る。改造の考は基督教に始めて起つた。基督教の愛の思想は、平等に働き得ないで彼の大戦争が起つた。そこで西洋人は基督教の教義の何處かに缺點があるのではないかと云ふ叫びを起した。

我日本に於ては、現在の行き詰つた經濟團體を處理するに、二つの武器を持つて居る。即ち日本精神と佛教である。

故に日本には精神的方面に於ては、西洋人は叶はない。日本人は西洋人の眞似をすることを慎まなければならぬ。

如何しても日本は教育思想を新にせねばならぬと云ふ事が、目前に見えて居る。即ち教育思想に宗教思想を結びつけなければならぬ。然るに日本人は之をやらうともしない。調査もしない。宗教の問題に來ると日本人は頭が如何かして居る。それもその筈、文部當局がそれをやらぬからである。教育と結びつけたのが將來の宗教でなければならぬ。教育と結びつけて害にならない宗教でなければならぬ。即ち迷信の根據の無いものでなければならぬ。本學に於ても禪の精神を失はぬやうにしなければならぬ。

最後に我が日本に於ては、思想國難の最善の手段として、經濟團體を處理するに、以上の二つの武器を有するから、安心してやる事が出来るのである。(十月廿九日佛教學會講演要記——文責在編輯者)